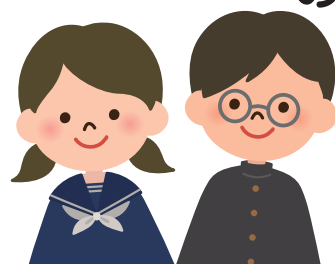




地域協同型 学び支援の 可能性を探る



本集いでは、平成27年4月から施行される「生活困窮者自立支援制度」に、生活困窮家庭の子どもたちへの「学習支援事業」が盛り込まれる中、子どもたちの学び・育ちを地域で支えるため、行政・学校・地域のボランティア団体等の関係者6名をパネラーに迎えて、ボランティア等の参加可能性を探りました。

情報交換第1部 地域の子どもたちを取り巻く環境を知る
学習支援の実践現場から見えてきたこと

〈話題提供①〉

学習支援の法的位置づけと振興局の取組み

盛岡広域振興局保健福祉環境部 主幹兼保護課長 菊池 潤考氏

来々年4月に施行予定の「生活困窮者自立支援制度」は、生活保護に至る前の段階で、自立相談・居住確保・就労準備等の自立支援に関する措置を講ずることにより、自立を促す制度です。

この制度には、世代間の貧困の連鎖（※1）を防止するため、「生活困窮家庭の子どもへの学習支援事業」が任意事業として位置づけられています。

盛岡広域振興局では、制度施行に先がけたモデル事業を、平成26年2月から「学習支援及び相談支援プログラム」として実施しています。平成25年度は滝沢市と矢巾町で、平成26年度は管内5町（矢巾町・紫波町・雫石町・葛巻町、岩手町）で、中学生（生活保護世帯及び準要保護世帯の子どもが中心）を対象とし、事業実施委託団体（※

開催日：11月15日
会場：ホテルニューカリーナ
主催：県社協ボランティア・市民活動センター・いわて県央バーソナルサポートセンター

2）のスタッフ、大学生等が、接し方や教材を工夫しながら関わっています。

事業の成果と今後の展望

参加した中学生には、大学生等と関わることで、将来のモデル、目標となる存在が身近にできたことが、学習意欲の向上につながったようです。また、大学生等も、分かりやすい教材の工夫、悩みを傾聴する経験などを通じた理解や成長が見てとれます。継続的な関わりの中で、学習以外の例えば食事などへの配慮（生活支援）の必要性も感じました。目に見える、数値化できる効果が現れるには、最低でも10年程度はかかると思いま

す。地域住民や関係者が協力しながら子どもたちを見守り、地道に事業を続けて行くために、地域社会の問題とし

て、理解と協力の輪をどのように形づくるか、検討が必要と考えます。

*1 貧困の連鎖：貧困家庭で育つことで子どもの健康や意欲が低下し、学力低下や就学制約等の様々な不利が蓄積する。その結果、子どももまた困窮状態に陥り、世代を超えて貧困が連鎖していく状態。
*2 事業実施委託団体：コンベ方式により、平成25年度は岩手県立大学に、平成26年度は一般社団法人子どもエンパワメントいわてに委託されている。

〈話題提供②〉

沿岸被災地の子どもたちの学びを支える

一般社団法人子どもエンパワメントいわて 学習支援コーディネーター 中村 美穂氏

震災後、陸前高田市教育委員会から、子どもたちの居場所が少ないこと、学習環境が整わないことを伺い、平成23年11月、陸前高田市内3か所に震災で学習環境を失った子どもたちが自主学習する場所「学びの部屋」を開設しました。平成26年11月現在、沿岸地域の、宮古市、釜石市、住田町、大船渡市、陸前高田市の4市町、17か所で実施しています。子どもたちと関わるスタッフ

は、地元の塾講師経験者、教員志望者、福祉業務経験者等を学習支援相談員として有給で雇用しているほか、県内学生ボランティアの協力を得ています。今後の課題と展望

現在、震災から3年が経過し、各地の子どもたち、家族、学校の様子が変化しています。これまでの活動を継続す

る中で、現場で把握したニーズをヒントに今後はさらに実施内容を検討することが必要と考えています。

また、不登校や虐待等、困難事例に気づいた際の、関係

機関との連携体制を整えることも課題です。

今後は、拠点での活動以外にも、将来の夢を描くきっかけになるイベントを企画実施していく予定です。

〈話題提供③〉

学ぶ環境が整っていない中高生に寄り添う

盛岡市福祉事務所

査察指導員

佐久山 久美子氏

就学支援事業開始のきっかけ

生活保護世帯の子どものための高校進学率が、非保護世帯より低いこと、また、進学しても中退するケースがあることがきっかけでした。

経済的に厳しい世帯の子どもが、学力が伴わず私立高校へ進学することで一層経済的負担が増える状況を改善するため、平成25年4月から、子どもの支援に焦点をあてた「盛岡市就学支援事業」に取

組んでいます。

事業実施状況と今後の展望

就学支援員3名が、家庭訪問や相談支援を実施。対象家庭と子どもたちの実態を徹底的に把握し、関係機関と連携を図りながら、学校を中退する前に原因を探ったり、中退後の選択肢を一緒に探ったり、様々な支援にあたっています。

日本では、子どもたちは義務教育等で教育を受ける権利

は保障されていますが、権利を行使できる環境が整っていない家庭が存在します。そのことで、学びに集中できない、学校に行けない子どもがいるという現状を残念に思っています。

平成26年10月現在、対象世帯の中高生のうち7割が事業に参加しています。

学校に行かなければ経験で

きないことを、補うことまでは難しくても、子どもたちが「関わってくれる大人がいる」と感じることで前向きになってくれることを願っています。

主役は子どもたち。子どもの可能性をどうしたら広げられるかという視点に立って、これからも続けていきたいと考えています。

情報交換第2部

ボランティア参画の可能性を考える

〈話題提供①〉

決断と対応の早いボランティアの参画

岩手県ボランティア団体連絡協議会

会長 加藤 隆男氏

ボランティアの歩み

40年前盛んだったボランティア活動は、施設慰問やイベント開催など非日常的なものでした。

阪神大震災をきっかけに、日常生活のすべてにすることが、

ボランティア活動につながるという認識が広がり、単発的な活動から、生活に役立つボランティア活動をしようにという流れができました。

以来、ボランティア活動の意味は重要性を増すとともに

〈話題提供②〉

中高生の学習の場と居場所づくり

盛岡夜回りグループ Step1 代表

後藤 敦博氏

学習支援に取組むきっかけ

ステップは、元々は路上生活者支援を行う任意団体として、平成23年6月に発足しました。

路上生活からアパートへ入居した方々の交流行事として開催していた「お楽しみ会」で、福祉事務所の職員から、

このような場を活用して学習支援をやってみないか、と提案され、平成25年1月から活動を始めています。

経済的な負担が大きく塾に行けない、学校には行っているが基礎学力が乏しい中高生を対象に、盛岡市内で月2回

多様化しています。

ボランティアの強み

ボランティア活動の強みは柔軟さと臨機応変さにあります。潜在的なニーズを掘り起こし、新しいアイデアで対応できます。そして、公的な組織に比べ決断も対応も早いのが特色です。

一つの活動を継続するためのポイント

- ①どんな人が、どのように関わることができるか考えること。
 - ②魅力をどうやってつくっていくか考えること。どんなプログラムを子どもたちに提示するか考えること。魅力があれば人は集まる。
 - ③実施するための資金を生み出す方法を考えること。
- 必要な事業を継続していくためには、これら3つの課題をクリアする高い調整力を身につけることが必要です。

の学習会を開催しており、大学生ボランティアや元教員を含む社会人ボランティアがスタッフとして参加しています。

学力向上というよりも、様々な人と関わりの中で、社会性を育むことに重点を置いているため、学習会は、皆でお昼ご飯をつくることから始めています。

これまでの成果と今後の課題・展望

事業開始1周年のふり返りを実施した際、参加している中学生からもスタッフからも共通してあがった成果は、参加者が人とのコミュニケーションを取れるようになったこと、進んで勉強するようになったことでした。多世代交流の場が、将来像を描くきっかけに

なっていると感じています。管理されない「ゆるい」空間で、自由な取組みができる任意団体の強みを活かし、今後は地域の中に様々な人が関わるができる、体験型拠点を増やしていきたいと考えています。

〈話題提供③〉

保護者や教師以外の大人と触れ合う貴重な場

矢市町立矢市中学校 校長 和田 修氏

学習支援事業に参加する生徒たちの感想

本校では、全校生徒426名のうち41名が就学支援を受け、そのうちの14名が学習支援を希望し、何人かの生徒がこれまでに参加しています。

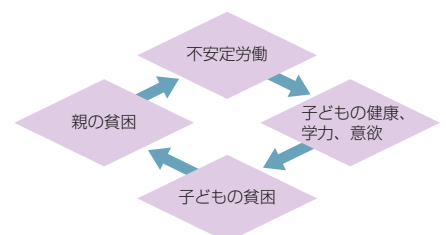
参加生徒からは、特に「年齢の近い大学生から勉強を教わったり、話ができて良かった」との声が多く聞かれます。生徒たちにとって、保護者や教師以外の大人と触れ合う貴重な場であり、将来の可能性を広げる場であると認識しています。

子どもや家庭の状況・地域への期待

現代の子どもは、以前に比べ精神年齢が実年齢より幼いといわれています。見た目がたとえ大きくなっていても、心では、家族の温かさ・会話を求めています。一方で

生活が困窮しているために、時間を惜しんで働かなければならない保護者もいます。子どもと向き合う時間がなかなか持てない現状があるのです。学校でも、子どもたちの寂しい気持ちを何とか補おうとしています。授業、部活動、生活指導、進路相談等、一人の教員が担う業務は幅広く、限界があります。学校に関わる教職員総数のうち、日本では教員の割合が8割以上なのに対し、諸外国、たとえばアメリカやイギリスでは5割ちよつとです。外国では教員は授業のみを担当し、外部支援者が心のケアや生活指導、部活等、授業以外の子どもへの支援に関わっています。子どもの支援は、地域の方々と連携して取組みたいと考えています。学校の大変さ、親の大変さ、子どもの大変さ

新たなセーフティネットの構築 貧困の世代間連鎖



(慶應義塾大学 駒村康平教授作成)



を皆で共有しながら、子どもの可能性をどうやって伸ばしていくことができるか、知恵を出して考えることができるようになるばと思っています。

幸恵氏 櫻

岩手県立大学社会福祉学部社会福祉学科 講師 進行



地域の中で子どもを支えていくためには、制度的な支援、親の支援など様々な方法がありますが、一つの切り口として学習支援があるのだと思います。学習支援の効果には、学力の向上と、社会性の育成という2つの側面があります。

子どもたちのありのままの良さ、力を伸ばしていく取組みは、ひとつの団体ではできません。学校も、地域も、ボランティアも、大学も、行政も関係団体皆で関わって、子どもを育て、社会を育てていく意識を持つことが大切と感じています。子どもは日々成長します。必要な時機(タイミング)を逃さないで関わることを、そして継続していくことが重要です。今日のつながりをきっかけに、できることから始めていきましょう。

盛岡地区



私たちが「豊かな
社会福祉の実現」に
貢献します

私たちは社会福祉の発展を願い、福祉の活動に協賛する企業です。明日の福祉を見つめ、地域社会に貢献します。

(医)緑明会 吉田消化器科内科医院

(社)岩手県獣医師会

(学)岩手医科大学

(医)智徳会岩手清和病院

(有)タケダ うな竹

(有)盛岡タイムス社

ブリヂストンタイヤ岩手販売(株)

モトモチ商事(株)

(株)NIPPONコーポレーション岩手統括事業所

(株)興和電設

(株)広田薬品

丸毛盛岡中央青果(株)

岩手スバル自動車(株)

岩手県労働組合連合会(いわて労連)

岩手中央酪農業協同組合

三機商事(株)

自由民主党岩手県支部連合会

日本共産党岩手県委員会

日本労働組合総連合会岩手県連合会

(医)正康会 平舘クリニック

東八幡平病院

藤根建設(株)

(医)真彰会 玉山岡本病院